

持続可能な未来に向け加速する選ばれるまちづくり 子育て世帯の転入超過が続く「あつたかひらつか」

近代都市としての成長を促進 農・水・商・工の総合力

東京都心部からは約60km（JR東海道本線・普通電車で東京駅から約60分）、県都・横浜市中心部からは約33km（同・横浜駅から約30分）と交通至便な平塚市。その近代都市とし



旧東海道沿いの江戸側入り口に設けられた平塚宿・江戸見附跡。旧平塚宿・歴史散歩のスタート地点としても親しまれている

ての成り立ちには、周知の通り、近世における東海道五十三次の7番目の宿場町「平塚宿」が一つの基盤となっている。

宿場を形成していた当時の旧東海道は、現在、市域を東西に横断する東海道本線より約200m北側を並行している。日本三大七夕祭りの一つ「湘南ひらつか七夕まつり」において、平塚駅に近い「紅谷パールロード」と共にメイン会場となる「湘南スターモール」は、この旧東海道沿いに延びている。

さらに、旧東海道から約300m北上すると、市役所本庁舎の手前を、現東海道（国道1号）が、旧東海道や東海道本線と並行して東西に走っている。

このように平塚宿時代の町割りを一つの基盤としながらも、近代以降の平塚市エリアを構成してきた要素は、非常に多岐にわたる。

市制施行以前の旧平塚町時代から発展した平塚宿エリアおよび平塚駅周辺エリア

おちあいかつひろ
落合克宏
平塚市長



と、相模湾に面し、漁業および河川を活用した物流の集散地として近世・近代に大いににぎわった須賀港とその周辺地区。さらに、相模川・金目川流域の平野とそれを取り囲む丘陵地に現在も広がる農業地帯、軍需産業を中心にした明治・大正・昭和初期に市域各所で構築され、今も技術が生かされている工業地帯などにより構成されてきた。

その様相は、時代の変遷で産業的規模の大きさのバランスを変えながらも、現在ま



「ひらつかタマ三郎漁港」と総称される「須賀港」と「新港」のうち、須賀港は江戸幕府公認七湊の一つ。相模川を利した物流拠点でもあった



山中湖を水源とする相模川。平塚市と茅ヶ崎市の間に開いた河口部で相模湾に注ぐ風景は雄大だ



令和7年で40年目を迎えた平塚市と東海大学の「交流協定」。記念事業の一環として「ひらつかタマ三郎漁港（須賀港）」で学生たちによる壁画制作を実施

で継承されている。農・水・商・工業が同居しながら地域経済を形成し、多様な顔を持つ現代都市を現出させている。

平塚市を地勢的に見れば、神奈川県ほぼ中央部にある「相模平野」南部に位置しており、市域東側に隣接する茅ヶ崎市や寒川町などの境界は相模川が担っている。また、市域北側には丹沢・大山山塊が、西側には富士山および箱根連山が遠望され、南側は相模湾に面している。

東京や横浜との至便な交通環境などと併せ、このように豊かな自然環境と都市的環境がほどよく調和していることも、平塚市の魅力と特色を示している。民間デベロッパーやシンクタンクなどが主



明治40年建築「旧横浜ゴム平塚製造所記念館（国登録有形文化財）」。日本火薬製造株式会社が建て、後に海軍火薬廠、横浜ゴム株式会社が所有。現在は平塚市が所有

催する「住みたい街ランキング」などで、平塚市がしばしば上位に位置付けられるのも納得できる。

平塚市が旧平塚町から単独市制を施行したのは、昭和7（1932）年4月1日とかなり早い。これは神奈川県内の主要都市として近代以降に特に大きく発展した、横浜市・横須賀市・川崎市に次ぐ4番目の事例だ。神奈川県行政区域としての「湘南地区」および、旧相模国のシンボル・相模川以西でも最初の市制施行となった。

「平塚市が早期の市制施行を実現した歴史的背景としては、一つには明治38（1905）年に日本火薬製造株式会社が旧平塚町の北部地域に進出したのを契機に、大正8（1919）年には海軍が日本火薬製造を買収して海軍火薬廠（※跡地は現在、横浜ゴム平



塚製造所）を設置。さらに横須賀海軍工廠造機部平塚分工場（※跡地は現在、平塚競輪場ほか）や日本国際航空工業（※跡地は現在、日産車体本社工場）など、官民の軍需工場や研究所などが大正・昭和初期から終戦間際に至るまで相次いで市内各所に設置され、稼働していた、軍需工業都市としての急速な発展の経緯があります。

また、平塚市は昭和20（1945）年7月に米軍の大空襲（平塚大空襲）で、市街地の約70%が焼け野原と化してしまいました。それも軍需産業が当時の平塚市に集積していたためと考えられます。



毎夏100万人以上の観光客を集める「湘南ひらつか七夕まつり」は平塚市の代名詞的イベント(毎年7月第1金曜日～日曜日)



真夏の風物詩「湘南ひらつか花火大会」は「湘南ひらつか七夕まつり」と共に昭和26年開始(毎年8月第4金曜日に開催)

(1981)年に平塚市に入職後、平成14(2002)年まで職員として勤務。翌平成15(2003)年から2期8年間の市議時代を経て、平成23(2011)年に市長就任。現在4期16年目を迎えている。

「昭和7年に市制施行した平塚市は、令和4(2022)年4月1日に、市制90周年の節目を迎えました。さらに『昭和100年』ともなった令和7年は昭和20年の『平塚大空襲』から80年の節目でした。

平塚市ではそれぞれの節目に記念事業を実施しましたが、こうした節目は同時に、持続可能な平塚市を構築するための契機にしていかなければ意味がありません。

そこで令和6(2024)年2月には市長就任後、3番目の総合計画に当たる「平塚市総合計画」ひらつかVISION」を策定するとともに、同年3月には『平塚市シティブロモーション指針』を策定して情報発信力のさらなる強化と刷新を図りました。

さらに令和7年3月には、市内唯一の鉄道駅・JR平塚駅を中心に、にぎわいを取り戻

し、駅周辺地区の再構築などを図るため『平塚駅周辺地区将来構想』を策定。行政・市民・事業者が一体となって、持続可能な近未来構築の基盤をつくるべく、多角的な取り組みを開始したところだ(落合市長)

市制施行時(昭和7年)に約3万6000人だった平塚市の人口は、本年4月1日現在、25万7399人と7倍以上に達しており、施行時特例市にも位置付けられている。人口のピークは平成22(2010)年11月の26万863人だが、それ以降もほぼ横ばいで推移しているのが目を引く。

駅周辺をみんなのリビングに！ WLBに優れたまちづくり

人口減少と高齢化があらがいがたい潮流になっている日本の状況下、平塚市の人口面における現況は、人口減少の緩やかさだけでなくポジティブな要素と言えるが、それだけではない。近年の平塚市における人口動態が一貫して転入超過の傾向を長期的に維持し、それが人口減少の波を緩和している事実は注目に値する。

統計の出ている範囲内では、平成27(2015)年度以降、令和7年度まで、平塚市は11年連続で転入超過が続いているのだ。とりわけ、令和6年1月に総務省が発表した「住民基本台帳に基づく人口移動報告」によれば、全体的に転入超過数の多い

夏の訪れを告げる『湘南ひらつか七夕まつり』は全国に知られ、昨年(令和7/2025年)は7月4日から6日に開催した3日間で約115万人もの観光客を集めました。そして『湘南ひらつか七夕まつり』は、宮城県仙台市の『仙台七夕まつり』を参考に、昭和26(1951)年7月に始まりましたが、誕生のキッカケは、この平塚空襲からの復旧・復興を祈念するとともに、市民を元気づけようと、地元の事業者たちが中心になって企画(※前身は昭和25/1950年開催の復興まつり)したことにあります

そう語るの、生まれも育ちも平塚市の落合克宏平塚市長だ。落合市長は昭和56

平塚市

(神奈川県)

市 政 ル ポ



平塚市を代表する文化芸術拠点施設「ひらしん平塚文化芸術ホール」。文化芸術を通して市民の交流拠点としても機能

神奈川県内でも、平塚市は政令指定都市を除いて茅ヶ崎市に次ぐ第2位となり、全国1719市町村のうちでも第10位に当たる2499人増を記録している。特に目立つのが、子育て世帯(世代)の転入の多さだ。

「少子高齢化の進展によって、平塚市でも人口の自然減は相変わらず続いています。しかし、それを補って代わっているのが、子育て世帯(世代)の転入の多さなのです。

それがどのようなメカニズムを背景に実現しているのか、断定的なこととは言えません。しかし、交通至便な湘南地区に位置する平塚市の地理的要件などを土台に、長期的な視点で、多角的に続けてきた地域活性化への事業や情報発信事業などが、総合的に効果をもたらしていること、それは事実だろうと考えています」(落合市長)

もちろん、日本社会全体の人口減少のトレンドは避けがたい。「平塚市人口ビジョン」の推計でも、2040年には約23万3000人、2070年の段階で約17万7000人まで減少するとしている。

そうした状況下においてもなお、平塚市が近年、子育て世帯(世代)を軸とする転入

超過傾向を維持できている要因の一つには、落合市長の言葉にあるように、実際、平塚市が長年にわたり継続的に実施してきた、多様かつ魅力的なまちづくりの実践があるのは確かだろう。次世代の育成に不可欠な「子育て支援」「教育支援」の充実などから、住宅ローン大手が主催する「本場に住みやすい街大賞・シニア編」などでもしばしば上位に位置付けられる、高齢者や障害のある人にも優しい福祉施策・事業の推進に至るまでの地道な取り組みを基盤に、平塚市の「魅力的なまちづくり」は現在、次のフェーズに移りつつあるとの印象が強い。

例えば落合市長就任から5年後、転入超過が始まった直後の平成28(2016)年に策定され、令和2(2020)年に改訂された「平塚市総合計画」に「平塚市総合計画」や「平塚市総合戦略」の共通テーマは「さらに、選ばれるまち・住み続けるまち」というものだった。また、令和6年に前出「平塚市シタイプロモーション指針」を改定した際には、持続可能な近未来を構築するためのまちづくりスロー

ガンを「あったかひらつか」に定めた。「『あったかひらつか』というスローガン、なかなかいいと思いませんか(笑)。語呂合わせみたいですけど、『平塚市総合計画』ひらつかNEXT」で進めた『さらに、選ばれるまち・住み続けるまち』の追求と、平塚市の住みよさ、元からの土地柄の持つ温かみを土台に、人と人とのつながりを大切にするまちづくりをさらに推進するという私たちの決意も込めて、『住んでみたい、さらに住み続けたい』と想っていただけのまちの実現を目指していきたい。『あったかひらつか』というスローガンは、平塚市の魅力を表現し、発信していくフレーズとして、人や気候が『あったか』と、『それ(そんな魅力やこんな魅力)もあったか』の二つの意味



「平塚駅周辺地区将来構想」のコンセプト「平塚駅周辺地区をみんなのリビングに!」を実現すべく湘南スターモールで実施された社会実験の様様



コンスタントに波が立つ平塚市の海岸には多彩なマリンスポーツの愛好者が年間を通じて集まる



海水浴、ビーチバレー、バスケット、ビーチサッカーなどあらゆるビーチスポーツが楽しめる「湘南ベルマーレひらつかビーチパーク」



海の公園「ひらつかシーテラス」はピクニック、スポーツ、グルメ、ショッピングが楽しめて大人気の複合公園施設

塚』などの大型商業施設の進出がここ10年間で相次いでいるのは、民間デベロッパーや大型商業施設の方々の綿密な市場調査の結果から見ても、現在の平塚市には『進出

を込めて、『あったかひらつか』を掲げました。多くの人がまちの魅力を体感し、共感し、共に発信し、『住みたい』『住み続けたい』と思ってくただけのまちを目指しています。

子育て世帯(世代)の転入超過現象がいつまで続くかは予断を許しません。しかし、そうした状況を受けてか、駅周辺は近年、マンションの建設がかなり

の勢いで続いています。同時に『ららぽーと湘南平

するのに魅力的な要素』が多くあると判断されているからこそその結果であろうと思いません。

さらに幸いなことに、『市民意識調査』を実施すること、近年は常に80%強の市民から『平塚市に住み続けたい』という前向きな回答を頂いています。回答者の中には、近年転入されてきた子育て世帯(世代)の方たちも含まれているわけで、そういった意味からも、非常に心強い思いを抱いています(落合市長)

人口3300人の《北の核》 ツインシティ完成後の近未来

子育て世帯(世代)を軸とする転入人口の安定的なプラス傾向とともに目を引くのは、平塚市の昼夜間人口比率の安定的な推移だ。常住人口100人当たりの昼間人口の割合を示す昼夜間人口比率において、平塚市は現在、100を少し下回った水準で推移。県内では厚木市に次ぐ高さで、平塚市内の雇用の場の豊富さなどを物語っている。

また、昼夜間人口比率が100前後を維持している状況は「職住近接」の比率の高さとも通底する。これは働き方改革の肝であるWLB(ワーク・ライフ・バランス)の実現にも不可欠な要素だ。

子育て世帯(世代)が中心の転入超過現象の持続と、マンション・デベロッパーや大

型商業施設側などからの高い評価は、こうした「暮らしてよし、働いてよし、休日を過ごしてよし」の「WLBに優れたまち」としての「平塚市の潜在的魅力」を抜きには語れない。

そして「平塚駅周辺地区をみんなのリビングに！」をまちづくりのコンセプトとし、令和7年3月に策定された「平塚駅周辺地区将来構想」に基づいて、同年夏から平塚駅周辺を舞台に開始されている多彩な「にぎわい創出」の取り組みこそは、さまざまなライフスタイルに対応し、WLBを重視した平塚ライフの可能性を探り、発信するシティプロモーションの一環と言える。

「総合計画と同様、『平塚駅周辺地区将来構想』を積極的な市民参加による取り組みとするためには、学校、自治会、商店街、平塚商工会議所、平塚青年会議所、地元で立地する企業や金融機関の代表、各種まちづくり団体など、平塚のまちに関わるあらゆる団体同士が、近未来に向けたまちづくりビジョンを共有し、着実な成果を確認しながら綿密に行う必要があります。

そうした観点から、まずはそれらの企業・団体などが総参加する《まちづくりサミット(現・まちづくりセッション)》を開催しました。

次に、新たなにぎわいの創生に不可欠な商店街の活性化を促すため、七夕まつりのメイン会場の一つである湘南スターモー

平塚市

(神奈川県)

市 政 ル ポ

ルで、買い物だけでなくみんながくつろげる場、交流の場、市民活動の場にもできるよう大型ベンチを設置し、子どもたちが集まれる広場とともに、キッチンカーや仮設店舗の設置なども行い、人の流れやにぎわいなどのような影響が出るかなど、多様なテーマに基づく社会実験を実施しました」(落合市長)

こうした実験は、現在も平塚駅周辺各所で随時実施されており、その模様については「みんなのリビングDAYS」と題する情報紙が作成されるとともに、平塚市公式サイトにも掲載されている。

平塚市にはさらに、「住みたい」「住み続けたい」と思われるまちを目指し、近未来に向けて推進されていく持続可能なまちづくりを強力に下支えする事業の存在もある。市域北部の大神地区で展開されている《ツインシティ大神地区土地画整理事業》だ。

「戦前から工業立地の進んでいた平塚市には、昭和30年代後半から工業団地が続々と形成され、精密機械、化学工業、金属・ゴム製品、紙パルプ、繊維製品など各種の製造業が立地していきました。

そのうちのひとつ、大神工業団地に隣接し、相模川の対岸に寒川町倉見地区を臨む大神地区の約68・8haの敷地に、平成27年から進めていた《ツインシティ大神地区土地画整理事業》の完了は、令和9(2027)年度に予定されており、完成後は約3300人

規模のまちが現出することになります(※ツインシティ大神地区のまちびらきは令和5/2023年1月28日に実施済み)。現時点(※取材は本年3月25日)でも、進出を予定していた物流施設や大型商業施設とともに、建設を予定していた小学校なども完成済みで、今後は住宅がさらに増えていくこととなります。そして、大神地区と相模川対岸の寒川町倉見地区の両地区を新たな橋(仮称・ツインシティ橋)で結び、川の東西両地区が一体となった『環境共生都市』を形成します(落合市長)

《ツインシティ大神地区土地画整理事業》は《神奈川県東海道新幹線新駅設置促進期成同盟会》が

中心となり、東海道新幹線の新駅の誘致と連動する形で企画された。寒川町に予定される新駅の誘致はまだ実現していない。だが、既に圏央道や新東名高速道路の整備も進み、新たなまちづくりと共に産業と雇用の創出、広域的な交流連携促進などには支障のない態勢



令和5年1月28日に実施されたツインシティ大神地区のまちびらき



航空写真で捉えた「ツインシティ大神地区土地画整理事業」の現況(右側の河川は相模川)

が構築されつつある。

これまで述べてきた、現代の平塚市を構成する多彩な顔(にぎわい再創生が進む市域中央部、伝統ある工業地帯、湘南海岸が広がる風光明媚な南部地区、米の生産量が県内最大の農業地帯など)に、平塚市が新たな「北の核」と期待し、神奈川県が「県の南のゲート」とも位置付ける《ツインシティ大神地区土地画整理事業》の完成形が、近々加わることになるのだ。

その時——、平塚市の近未来図はどのような化学反応を起こすのだろうか。「その日」の到来が興味深く待たれる。

(取材・文：遠藤隆／取材日：令和8年3月25日)